様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００１４

研究課題名（和文）カントの人間哲学の総合的理解の試み

研究課題名（英文）A Trial for a Synthetic Comprehension of Kant's Philosophy of Human Being

研究代表者
渋谷　治美（SHIBUYA, Haruyoshi）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：５０１２６０８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：　『純粋理性批判』の摘要の作成、『道徳形而上学の基礎づけ』『天界の一般自然史と理論』「嘘論文」などカントの主要著作の精読を通して、自分のこれまでのカント研究の成果を「カントの人間思想に関する十の仮説」としてまとめた。これをこの三年間に研究会、学会、大学の講義、講演等で口頭発表したが、今後数年間のうちに上梓したい。
　本仮説の主軸は、「人間の自己対象化的性格の剔抉」がカントの全哲学的営為を貫いていたと把握することができる、というものである。これがカントの認識論、実践論、目的論、宗教論、政治論、大学論などを串刺しにしている、という視点を今後国際カント研究の世界にも発信していく。

研究成果の概要（英文）：　I have made a summary of "Critique of Pure Reason" and have studied other his main works in this period. Through those efforts, I could complete "10 Hypotheses on Kant's Philosophy of Human Being" from my whole studies done until now. These 3 years I spoke these hyopotheses in various occasions, for example, in a society for philosophy, in learned societies, for lectures in two universities and for a lecture in an intellectual group. I will publish a book in a few years on those hyopotheses.
　My main view among them is that >to elucidate the character of human being as self-objectification to the outer world< is his main thema which penetrates his whole philosophy. I hope to make popular this point of view also all over the international world of Kant study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：カント　人間思想　自己対象化　演繹論　内感　純粋統覚　観念論論駁　私は考える

１．研究開始当初の背景

カント思想をどういう見地から総体的に把握することができるかについては、十九世紀以降、本研究を開始するにいたるまでさまざまな流派が隆盛し、衰退し、再評価されてきた。研究代表者（以下「私」という）はこれまでこういう観点から過去のカント理解の系譜を網羅的に追うことはしていないが、多少とも文献に直接当たったことのあるものとしては以下のものがある。――フィヒテはカントの超越論的な主観主義をさらに徹底させてその知識学を構想した。ヘーゲルはカント哲学全体を、近代に生きる人間の自由を高唱した哲学として評価したうえで（『哲学史』）、自分の体系に重要な一契機として組み込んだ（『精神現象学』）。ショーペンハウアーも『意志と表象としての世界』において、カントの意志の倫理学とはかすかに、超越論的観念論としての認識論とは密接して、カント哲学を世界と人間の総体を解明した哲学と受けとめようとした、といえばいえる。ファイヒンガーがカント哲学をどこまでも「＜あたかも～かのように＞の哲学」（同名の主著がある）として把握しようとした視点は、今日でも生命力を保っていると思われる。H.ハイムゼートが執拗にカントを存在論的に把握しようと試みたことには、いまでも一定の意義があるといえよう。戦後ではG.マルティン、F.カウルバッハ、G.プラウスらがそれぞれの視点からカントを総体的に把握しようとしていることも訳書を通して知られている。他方、私はまだじかには勉強していないが、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて新カント学派に属する多くの研究者が、彼らなりに首尾一貫したカント解釈を提案したといわれている。

日本のカント研究も明治以来の厚い伝統を有する。なかでも天野貞祐、和辻哲郎のカント理解は出色と思われる。戦後になってカントを総合的に理解しようと試みた先行研究者を何人か挙げるとすれば、原佑、岩崎武雄、三渡幸雄、坂部恵、高峯一愚、宇都宮芳明らがいる。現役の日本のカント研究者のなかには、これから成果が期待される人を含めて多数の者が、海外との研究交流を踏まえつつ、それぞれ個性的なカント像を構想している。

こうした国内外の研究史、研究動向のなかにあって、私はこれまで独自なカント観を抱きつつも（後述）、多くの視点を批判的に学んできた。一つには、カントを『純粋理性批判』を中心にして近代科学を正当化する認識哲学として評価すること、それもこの主著を単に超越論的観念論による構成的な認識論の書とのみ受け取ること、の狭隘さを学んだ。逆に、カントをその叡知的な道徳論を中心に評価する人びと、あるいは『判断力批判』における目的論を中心に評価する人びとには、ややもするとそうした領域におけるカントの哲学説の基礎にも『純粋理性批判』の思考枠組が確固として存していることを軽視する傾向が見られることも学んだ。あるいは、カントは敬虔なクリスチャンであったとして、その見地から例えば『純粋理性批判』の弁証論、『実践理性批判』の弁証論（要請論）、『宗教論』に収録された諸論考をいわば串差し的にキリスト教と矛盾しない学説として理解しようとする試みがいかにカントの真意を捉えそこなったものであるかも、ようやく感知するようになった。さらには（総合的理解の試みとは最初からいえないが）、カントの後年の政治的立場をその哲学説と切り離して強調する弁の片手落ちであることも常に感じてきたところである。

２．研究の目的

カントはちょうど 50 年におよぶ著作活動を通して、自然科学に関する諸仮説、認識論、実践論、目的論、宗教論、平和論、人間学、等々の分野にまたがって多面的な哲学・倫理思想を公にした。そこには、とくに批判期以降のカントの思想において、これら多方面の思索を貫く首尾一貫した問題意識と思想的立場があったことは疑えない。だがそれをどのように描くかにはさまざまな見地があるだろう。私はこれまで主にカントの認識論と倫理学の研究に携わってきたが、その総括として、「人間の自己実現論・自己対象化的性格」と「地上における最高善の実現」の二つを鍵概念として、カントの人間哲学を総合的に理解することを試み、それを著作として内外に提案することを目的とした。

３．研究の方法

［研究計画調書に記載した研究方法］

最初の二年間をかけて、私がこれまで蓄積してきたカント関係のすべての研究業績（学会発表等も含む）を、 本研究「カントの人間哲学の総合的理解の試み」という課題における二つの視点（「研究目的」参照）に即して、総点検する。それによって、①仮説の妥当性の検討、②これまで研究が希薄だった領域（議論の弱いところ）の洗い出し、③二つの視点のいっそうの有機的連関の練り上げ、に努める。国内外の四人の研究協力者にも批判を仰ぐ。並行して平成 24 年度の一年をかけて、④先行する他のカント総体理解との対質に努める。同年の後半から、本研究の総合的、体系的構想（章立て）を確立したうえで、執筆に取りかかる。最終年度（平成 25 年度）は、本研究を細部に亘って綿密に仕上げる。一方で研究成果報告書を印刷しつつ、他方で本研究を単行本として速やかに出版する準備を進める。

［実地の研究方法］

上記の①②③はほぼ遂行できた。④については実施できなかった。これらを前提としたうえで、体系構想の確立を果たすことができた。しかしこれを上梓するべく執筆するには至らなかった。また研究成果報告書の冊子を作成することも叶わなかった。

４．研究成果

研究成果として、「カントの人間思想に関する十の仮説」を細部に亘って立てることができた。その骨格のみを以下に示す。

〈カント仮説〉

Ⅰ．カントの哲学の営み（Philosophieren）を貫く随一の思想（Hauptgedanke）は人間の自由の確証であった。それは、①一方で、神による創造という宗教的・神学的束縛からの解放（自由化）という契機と、②他方で、自然必然性による意志の汎通的規定からの超越という契機とからなる、二正面作戦として遂行された。

Ⅱ．カント『純粋理性批判』における〈現象認識の超越論的解明〉（認識論）は、逆にたどればそのまま〈人間の外界への自己対象化的性格の剔抉＝「経験」の成立の解明〉（自己実現論とも）として読むことができる。

Ⅲ．カントの倫理思想の随一の特質が〈意志の自律〉にあることは明白であるが、それは表裏それぞれ二つずつ、計四つの複合的な戦略目的からの帰結であった。まず、神への他律と、②経験論的な自愛の原理による他律の、二つの他律を回避することを表の戦略目標とする。次いで同時に、③スピノザの自由ニヒリズムと、④汎通的な自然の因果連鎖の全面的必然論（これも自由ニヒリズムの一つ）とから帰結する価値ニヒリズムを回避することを裏の（いっそう深刻な）戦略目標としていた。

Ⅳ．カントの実践論・倫理思想・宗教論はすべて「最高善の理念の地上における実現」という（究極の）義務に収斂する。

Ⅴ．カントの政治的、歴史的立場は、（Ⅲ．Ⅳ．からの帰結としての）世界市民主義に基づく地上における世界共和制の早期実現にある。晩年の学問的・宗教的・政治的発言はすべてこの見地で一貫している。

Ⅵ．Ⅴ．と密着する戦術的文章術として、カントは二枚舌ないしカムフラージュを意図的に随所に駆使している。この文章術はすでに若いころからカントにとって自家薬籠中のものであった。

Ⅶ．C. F. Stäudlin 宛て 1793.5.4.付けの手紙にある３＋１の課題は、①まず、カント自身の学的営為の経歴をそのままの順序で回顧したものとして受けとめることがで

きる。②ついで、カント自身の学問体系論・総合人間学の構想を表しているものとして読むことができる。③さらに、カントの大学論・教育論として読むことができる。

Ⅷ．最晩年のカントは、価値ニヒリズムと紙一重の思想的境地に至ったと思われる（Ⅲ．③④、Ⅴc.、Ⅵd.と連動して）。

Ⅸ．カントは現象認識に関しては（12のカテゴリーによる原則に則って）一義的な因果必然的な決定論である（Ⅱa.からして当然のごとく）。

Ⅹ．以上のⅠ．～Ⅸ．のテーゼは、総じて「人間賛歌思想」として総合することができる。

［付随的な研究成果］

○『純粋理性批判』の四回目の通読を果たし、原則論までの詳細の摘要を作成した。これを繰り返し読むことで本書の理解に格段の厳密さが増した。また、この書を発端とする批判期のカント思想の全体が確信された。

○『天界の一般自然史と理論』を精読することにより、カントの自然観が徹底した機械論であることを確認し、さらに、それが現象世界の認識として晩期に至るまで揺るがなかったことを確信した。

○いわゆる「嘘論文」を徹底的に読み込むことにより、この論考自体にカント特有の二枚舌（一種の嘘）が幾重にも籠められていることを発見した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① （書評）渋谷治美「人間と構造　ミシェル・フーコー著王寺賢太訳『カントの人間学』」掲載誌：日本カント協会編『日本カント研究　第12巻』理想社 pp.223-226

〔学会発表〕（計２件）

① 2011.10.22　慶應義塾大学三田哲学会平成 23 年度例会（招待講演）渋谷治美「カントの人間哲学を綜合的に把握することは可能か」（於：慶應義塾大学三田キャンパス）

② 2011.11.11　日本カント協会第36回学会カント・ワークショップ（指名発表）渋谷治美「『純粋理性批判』「第四パラロギスムス」「観念論論駁」「演繹論」の問題テクストを読む」（於：首都大学東京・南大沢キャンパス）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

① 研究会発表：2013.8.25　カント研究会例会渋谷治美「「嘘論文」の二枚舌について」（於：法政大学）
② 講演：2013.5.18　日本アスペン研究所ウィークエンドセミナー（招待講演）渋谷治美「ゲーテとカント――アスペン精神の原郷を索めて――」（於：富士ゼロックス総合教育研究所）
③ セミナー講演：2012.9.29 日本アスペン研究所・奈良エグゼクティヴ・セミナー（招待講演）渋谷治美「人間の自由について」（於：奈良ロイヤル・ホテル）
④ 研究会発表：2012.4.29　カント研究会例会　渋谷治美「カント人間思想の総合的把握はいかにして可能か」（於：法政大学）

ホームページ等：なし

６．研究組織
(1)研究代表者
渋谷　治美（SHIBUYA, Haruyoshi）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：50126083

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし